

後世に至りて、うちかばねの類ひおこり、字號の屬生ずるは、文華の盛なるなり、たゞ又諡といふことあり、崩後に改め名づく、神武と申、綏靖と申奉るこれなり、今の俗稱は、假名あるひは呼名ともいふ、これ保元平治の比よりやはじまりけん、某郎などいふこと多し、これ通稱にて、伯仲をわかつに數の序次を以てす、これにむかへて實名といふ稱はおこれり、また名乗ともいふ、名乗は、もと人に對して我名を唱ふることなり、古事記萬葉集に、名告ナノリと傍訓し、東鑑に名謁ともかけり、皆人に對して我名をなゆる義なり、のりは、のりことなどののりにて、言語にあらはすなり、さればわが名をなゆることよりして、つひに實名を名のりといふことにはなりたり、さてその名、後には家々の通り字ありて、代々同字を用ゆ、古にも淳和天皇の御子たち、多く上に恒字を置れ、仁明天皇の御子たち、下に常字を置、文德のみこ、上に惟字を置れし類、又清和天皇を惟仁と申せしより始まりて、醍醐天皇を敦仁、一條天皇を懷仁など申すより、以後皇子たち、凡て某仁とつけらるゝ、ことにはなれり、通り字のはじめ、これらに本づけるならん、また尊上の人、卑賤の者に名の一字をあたふること、源平盛衰記、北條九代記等に見え、當世に至りては恒例となりぬ、また女の名、古代は男子と同じく、某命といひ、中古は某子といひ、後世は於の字をつく、於是阿にかよひて助辭なり、これ婦女の名は簡易なれば、唱よき爲にいひつけしにや、

〔十訓抄〕天智天皇世につゝし、しみ給事ありて、筑前國上座郡朝倉と云所の山中に、黒木の屋を造ておはしけるを、木丸殿と云、圓木にて造故也、略○中さてかの木丸殿は、用心をし給ひければ、入來の人、かならず名のりをまけり、

朝倉や木の丸殿に我をれば名のりをまつゝ、行はたが子ぞ

是天智天皇の御歌也

〔枕草子〕殿上のなだいめんこそ、猶をかしけれ、御前に人さふらふをりは、やがてとふもをか